

フロラトリスタンは14歳。母と恋人が家庭内暴力の惨状を語る間、テーブルの下に隠れて耳を覆う。「あつりにづらくて、聞くのも、思し出すのもいや」と語る。シヤティヨ、フランス、1998年。

特集

DV 夫、恋人から 暴力を受ける女性たち

世界中に戦争や紛争があり、身近に暴力をはびこる時代。日々の生活は危険と背中合わせだ。格差や貧困が暴力の温床になっており、自分の身を守る安全ではない。いちばん信頼できるはずの夫や恋人に暴力をふるわれる女性にとって、安楽な場所はない。不寛容が蔓延する時代に、暴力は力強い者を狙いつつ

写真：エリザベツ・サダン



中央の女性は夫からの暴力を受けていたが、最近ではアルコール中毒の息子までが自分に暴力をふるうようになり、悲しくてならない。駆け付け警察に事情聴取される母と息子。98年



この女性は恋人にハンマーで殴られた。逮捕時に彼はショットガンで武装していた。いつも暴力を受けていたが、このときは殺されると思ったという。女性は告訴するつもりだと話した。マルセイユ北病院。1998年

3日に1人がDV死

フランスの女性には暴力の犠牲者が少なくない。夫や恋人の暴力により、3日に1人の女性が亡くなっている。

このような状況を目の当たりにして、平静でいられるだろうか。どうすればこの状況に抗することができるのか。暴力について語ることは困難を極めるが、沈黙することはこの被害者を、再び被害者にしてしまうことにはかならない。

家庭はもともと暴力が覆い隠されやすい場所だ。写真家はそこにはいない。だが私はそこに行き、撮る。私は何としても伝えたいと思う。

「こんにちは、一部の女性にとっては夜道や地下駐車場より危険な場所、それは自分の家である。男性がもともと容易に虐待したり、暴力をふるったりするのは、見知らぬ他人にはではない。一緒に暮らす相手になのである。」

1989年に政府が注意喚起のために発したこの声明も、何の助けにもならなかった。問題は、あまりにも深く隠されていたので、人々は長らく無関心のままだった。

フランスでは日々、虐待、暴力、侮辱により、女性の人生が失われていく。こんにちは、夫婦の10パーセントがDV（ドメスティック・バイオレンス）を経験している。この状況を打ち破るべく、私は彼女たちに会いに行き、足

跡をたどって、フランス中の病院、警察、そして家々を訪ねた。

女性カメラマンとして私は、この深刻な問題について取材し、何かの役に立ちたいと願った。そして取材が進むうちに、女性をDVの被害者にしてしま

うプロセスに行き当たった。女性たちは、自分に暴力をふるう男性であっても、愛していると思いつ込んでいたのだ。リスクを冒して、身近にいる夫の暴力を公表することはありえない。「夫は優しくいい人で、ふたりはいい関係である」と言い、暴力を糾弾することなどありえない。そのようにして社会はこの嘘を受け入れてきてしまった。すべてを失うリスクなど冒せない

でいる、たくさん女性たちから、何度同じ言葉を聞いたことか。沈黙は何よりも重い。夫の社会的地位、羞恥心による壁、そして沈黙が、DVを見逃

ごさせてしまう。

痛みに向き合う

告発は、被害者が解放されて自由になることが確実な状況でしかされない。見てきたすべてのケースの中で、何人の女性が本当に解放されたのかを私は知らない。何人かは、自分に暴力をふるった当人と一緒に帰宅しなければならなかった。

間違いはゆっくりと起り始める。男たちは、まず子どもを殴り始める。そして子どもたちの母親である妻を殴

るようになる。このとき、子どもたちはただただ縮こまっているというだけにはとどまらない。母親が殴られているとき、子どもたちは、まぎれもない被害者なのである。女性たちにとって悪い夫であっても、子どもたちにとっては良い父親であるという話をよく耳にするが、それは間違っている。子どもたちの面前で妻を殴ることは、親が子に示す手本にはならない。悪い夫は、すなわち悪い父にはならないのだ。

許可が得られる限り、私は取材した女性たちの写真を公開している。取材期間を通して、ひどく落ち込むこともあったし、無力感にさいなまれ、悲しくて泣きました。しかし、投げ出した

いと感することはまったくなかった。私はこの痛みに向き合い、私自身に向かつて語りかける。

「私は、この状況を人々に向かって訴えたい。私は影のようにあなたに近づく。私はあなたのために証言をしたい。」

病院、警察、刑務所での取材は困難を極めた。顔を出したくない女性のためには、顔を覆うか、あるいは後ろから撮影するかを彼女自身に選んでもら

った。撮影した女性は、もはや特定の女性ではない。他のすべての女性を象徴する存在である。彼女は自分の意志で証言する。すべての同じ境遇の女性を代表して証言をする姿を、写真に写

し取る。そのように証言し、写真に撮ることによって、女性は自分自身を肯定的に見ることができるようになる。それでもまだ、痛みは残る。傷を覆った手とガーゼの隙間から覗く微笑は、こわばって見える。

私は、この状況を憂い、考え、告発するために、すべての写真を発表したいと思つた。沈黙と黙殺、そしてこの耐え難い状況から彼女が抜けだし、自分の居場所を見つけて自分の言葉で話すために、写真の発表が不可欠だと思つた。そうすれば、そして最後に、彼女たちはこの耐え難さを受け入れられるようになる。

すべての写真は存在証明である、とロラン・バルト(注)は書いた。私は、これらの写真が証明してほしいと願う。そして皆が考えてくれることを望む。

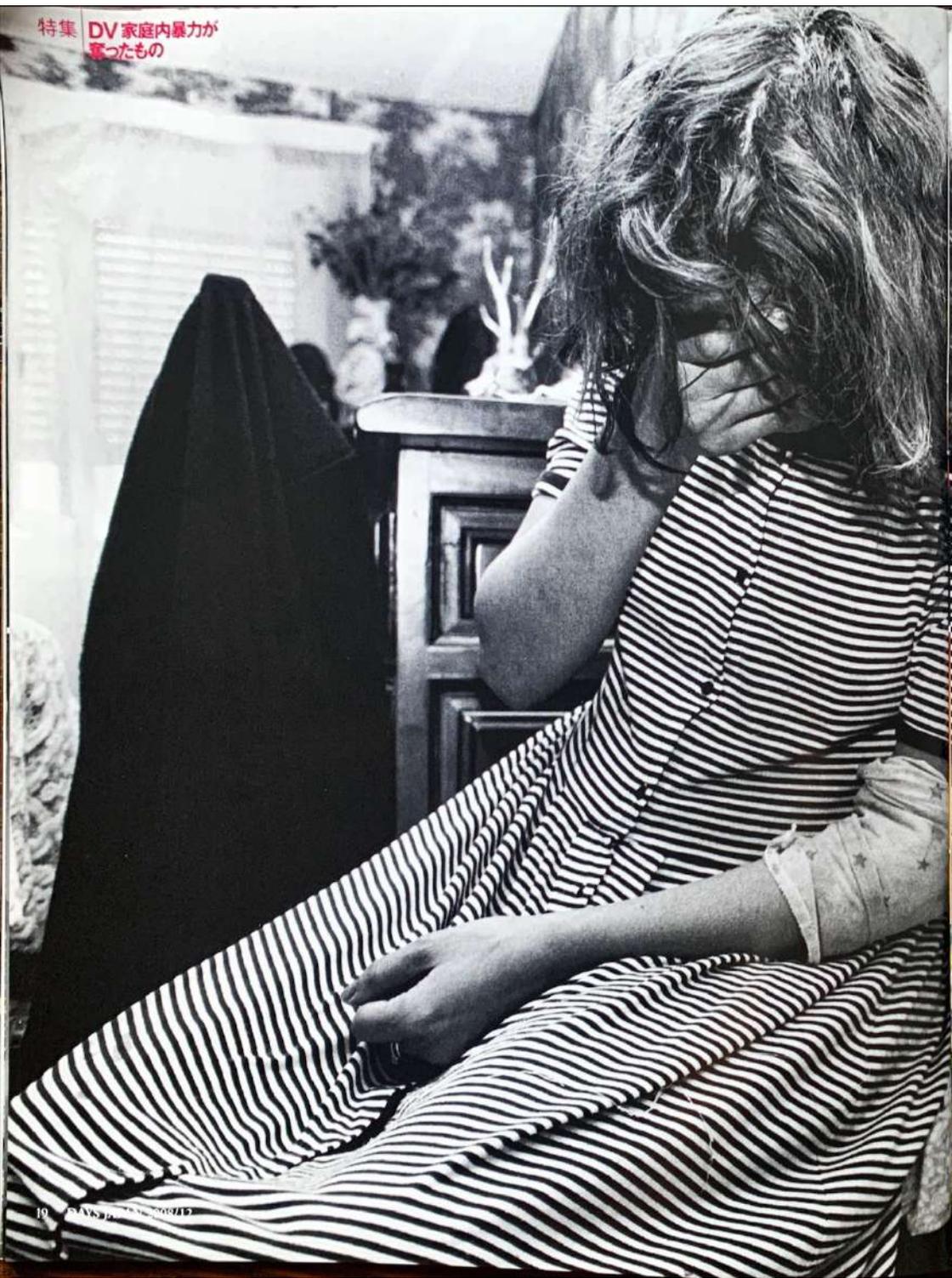
写真は私にとって、無関心と闘ったもの、そして告発するための武器だ。

(構成/編集部)

写真に向き合う

1992年、リジー・サタン、シャリーナ・ナストとシズ・マリン、エマ・テア、土井の出版、内装後のコホ、不法移民、エチオピアの早期期、未成年囚の取材を行う、ヘルビニヤン、国際フォトジャーナリズム基金、多くの受賞があるほか、98年のユニーオン、スミス賞では最終候補となる、バイユー、戦争特派員賞受賞。

(注)ロラン・バルト(1915-80)。フランスの記号学者、思想家。著書は「明い部屋—写真についての説書」(みすず書房)ほか。



電気代の支払いをめぐる口論の末に、この女性は夫から花瓶で頭や胸を殴られた。救急病院に搬送され、治療を受ける間、女性は4人の子どもたちの面倒を隣人に頼まなければならなかった。トゥールーズ・フランス。98年



特集 DV家庭内暴力が
奪ったもの

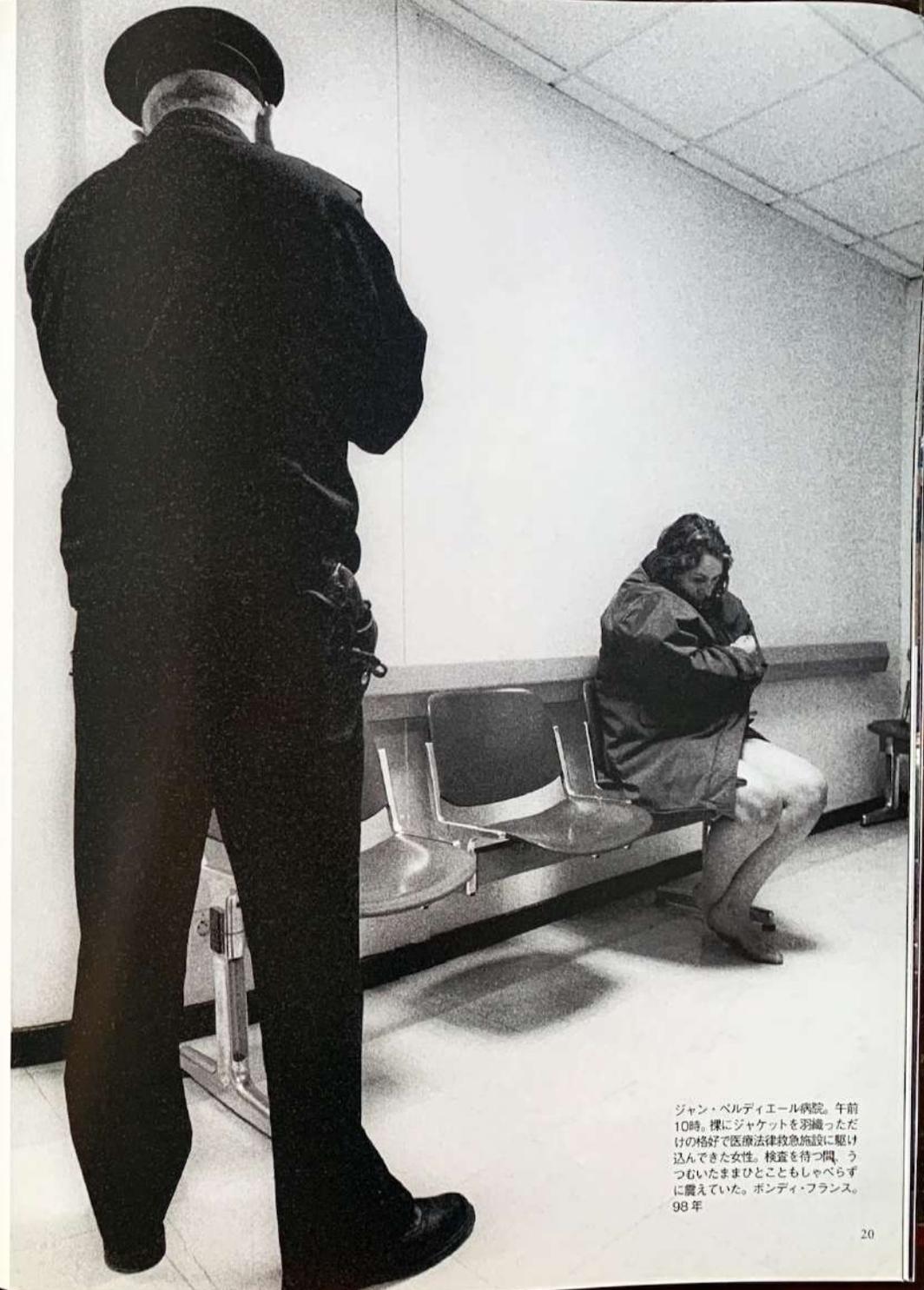
URGENTES
ADULTES



ジャン・ベルディエール病院。恋人
と5年間一緒に住んでいるこの26
歳の女性は語る。「1年たった頃から
彼は暴力をふるい始めましたが、
今日ほど激しく殴られたのは初めて
です。母はいつも父から殴られて
いました。私はそんな人生はいや」。
ボンディ・フランス。98年

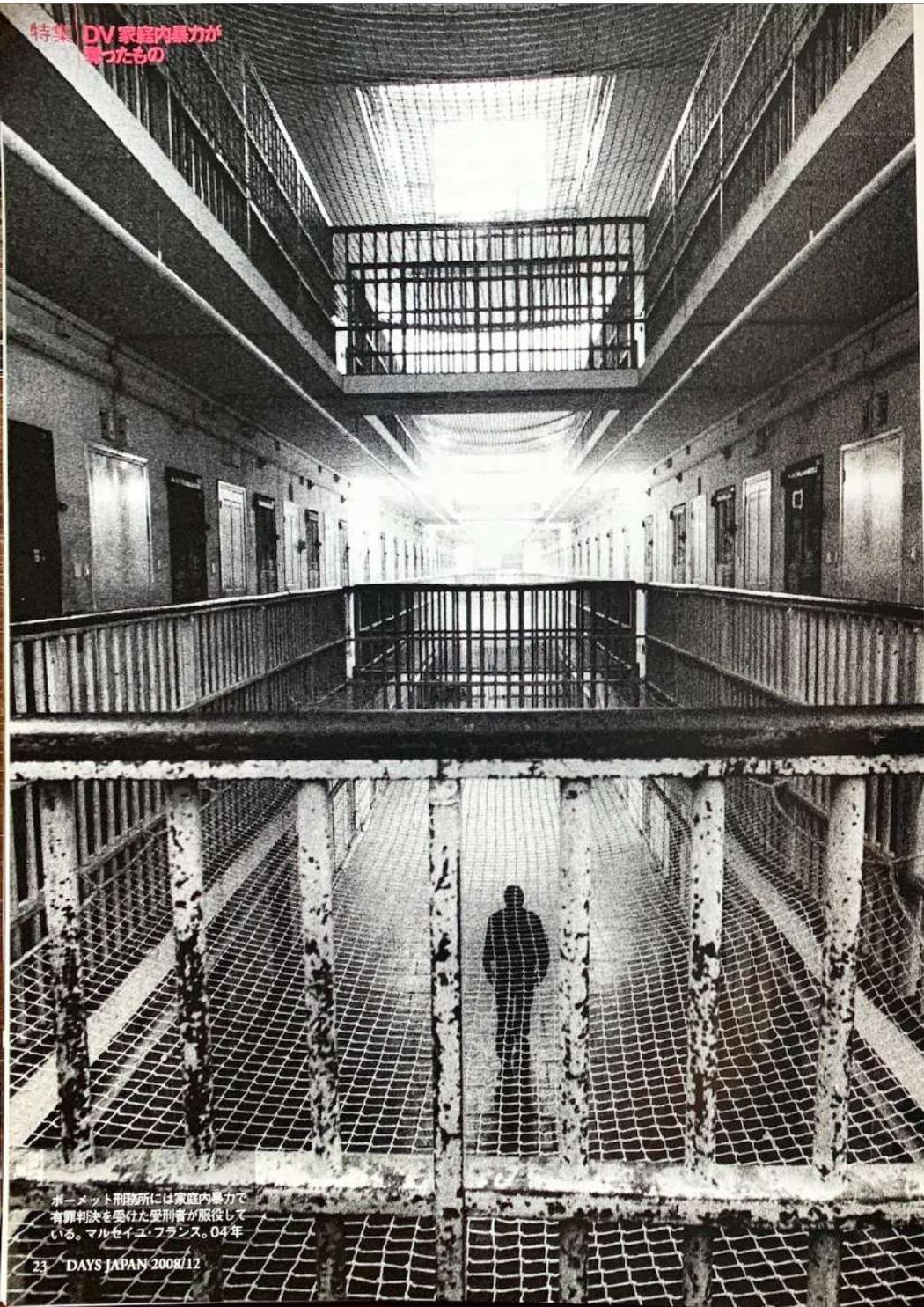


夫にナイフを突き立てられた後、子
どもたちに見せる被害女性。ルーア
ン。98年



ジャン・ベルディエール病院。午前
10時。裸にジャケットを羽織っただ
けの格好で医療法律救急施設に駆け
込んできた女性。検査を待つ間、う
つむいたままひとこともしゃべらず
に震えていた。ボンディ・フランス。
98年

特集 DV 家庭内暴力が
増えたもの



ポーメット刑務所には家庭内暴力で
有罪判決を受けた受刑者が服役して
いる。マルセイユフランス。04年

女性の権利獲得のための集会が行わ
れた。「虐待を受けたら、ここに電
話を！」というプラカードを掲げた
団体。パリ・フランス。98年



逮捕・起訴され、裁判所で出廷を待
つ加害男性。正午。ストラスブール・
フランス。2004年2月